

面 生 新

水俣病のあおりで獲った魚が売れず、売れても安く買いたたかれて困っていた不知火海漁民の救済策に、県が

真珠母貝の養殖計画をたてている▼ドロ縄式といえはそれまでだが、仕事をするにはキツカケが大事なことで、水俣病が起こらずとも沿岸漁業がひん死の状態に陥っていた時ではあり、真珠母貝の養殖で一気に立ち直りの突破口が開かれたとでもなれば、無為無策のわる口は消えよう▼今まで水俣病に関するニュースは、すべて暗く、悲惨なものばかりだ。そのうえ暴力沙汰まで起きてしまった。養殖は効果があがるのに長時間かかる。それだけに迅速な手が必要なのだ▼県産真珠は三十三年度に七百二十八キ、価格にして七千八百万円の収入があるが、その母貝は年に四百万個も県外から買っている。このうち半分を不知火海で養殖して千六百万円ばかりを地元にとそうというわけだ▼しかし、すべての漁民が真珠母貝養殖にかじりつくものではなく、極く一部に限られよう。伊勢湾台風で真珠と母貝養殖の本場・三重地方が手ひどく被害をうけ、いっちゃん悪いがその火事場かせぎという希望的観測も、対策をたてるうえに相当重く考えられたであろう▼起

死回生の策は何んといつても漁労の外にはない。いま、不知火海に見切りをつけた津奈木、佐敷、湯浦各漁協の船が対馬海域に活路を求め、冬場のイカ漁も成績がよいという。自主的な漁場転換ということは、目の前の海にこだわっている多くの漁民にとって考えねばならぬことだ▼水俣病紛争調停委員会が真剣に困窮漁民の救済を考えている。しかし、想像外の有利な条件に落ちついても乾いた砂に水一滴でしかない。騒ぐだけでは長い間の漁業不振が解決するわけもないのである▼真珠母貝養殖は、全く新しい形の金として落ちる。その意味では一つの漁火である。沿岸から近海への思いついた漁業転換に、水俣病が踏み切らせたのだとすれば、禍いは福となる▼いまからでも遅くはない。漁業転換促進機関を設け、新しい船出の羅針盤をきめたらどうであらう。